浄土真宗のすくい③　本願寺派布教使・行信教校講師 中西昌弘先生



経典（お経）の言葉というのは、難しい言葉で言ったら「託事顕法」といって「事に寄せて真実をあらわしていく」、いわゆる一つの出来事を通して真実とは何かという世界を挙げられるのです。

例えば『大無量寿経』でもいろんな譬えが出てきます。しかし、この譬えも我々の常識に合わせて読んでいったら、絶対にわかりません。

我々の常識の世界のことを「思議」と言います。思いや計らいということです。ところが、お経の世界というのは、我々が使う言葉で説かれてあったとしても、我々が使う言葉とは少し質が違うということなのです。

我々が使う言葉は、単に手段や道具としてその言葉を用います。しかし、お経の言葉というのは、手段や道具ではなくて、真実の世界を私に取り次ごうとして、我々が使うギリギリの言葉の状況に応じてはたらいてくださっています。そういう状況になりますから、質が違うということは、出所が違うということですね。

この真実の言葉を人間の常識でいくら受け取ろうとしてもわかりません。人間の思いや計らいを超えた世界ですから、「不思議」と言います。それを常識でいくら受け取ろうとしてもわからないですよということで「不可思議」とも言います。

その時にどうすればいいかと言ったら、一番手っ取り早いのは、その仏さまの仰せを素直に受け入れていくということが大事です。その素直に受け入れていくということを、浄土真宗では「信心」と申します。

苦悩を抱えた私たちの“いのち”を救おうとして、阿弥陀さまは他の仏さまが見捨てていかれたとしても、私だけは必ずこの“いのち”を救いとってみせるといわれました。一劫だけでも長い長い時間ですが、さらに五劫という5つの劫が重なっていく、とても考えの及ぶことができないという、そういう状況ですね。そんな長い長い思案の末に、我々の救いというものが確実にはたらいていく道を見事に完成してくださいました。

しかも五劫という長い長い時間を費やして、この工夫を凝らし、そしてさらにその考えが確実なものになっていくために、今度は「兆載永劫」という劫を超えている、時間を超えた、そういうはたらきを繰り返すことによって確実に必ず救われていくという、その救いのあり方が実現をしたのです。それを「本願成就」と言います。本願が完成しましたよ、どんな人でも必ず救われていく道を今私は仕上げましたよと、その名のりが実は人格的に表現をしたら、阿弥陀さまというそういう表現になります。

そしてそれを国土的に表したら、お浄土とか、安楽とか、安養とか、あるいは極楽とか、そういう様々な呼び方で表現をします。

2021年5月1日「正宣寺永代経法要」より